

統一思想の宗教観に関する研究：多元主義と統一主義の平和的共存に向かって

清心神学大学院教授 黄珍修

- I. はじめに
- II. 統一思想の宗教観は‘神中心多元主義’なのか？
- III. 多元主義と統一主義の平和的両立と共存
- IV. 終わりに

I. はじめに

‘統一思想’は、文鮮明先生のみ言に含まれている世界観を思想的に定立したものであるとして、その中には哲学史全般の流れが含まれているだけでなく、その流れを一つにまとめることのできる‘統一’の基盤を提供している。このような‘統一’を指向する統一思想の根底には、周知のとおり、文鮮明先生の思想的な根といえる神観が占めている。神観というのは、哲学的様相と共に、そのような神観を追従する宗教的脈絡の中で一緒に扱われる時、その意味が確かなものになりうる。したがって本論文では、統一思想が内包している神観を宗教的脈絡で照明し、特に、統一思想の神観が、宗教間の関係をどのように理解しているかについて議論してみよう。このような試みは、統一思想の宗教観が、今日宗教多元主義が抱えている相対主義的限界を克服しうる代案を提示できるか否かに対して焦点を合わせている。

統一思想の宗教観の基本前提は、やはり唯一神観を持っている他の宗教と同様に、神様の存在である。人類の霊的、精神的、文化的基底で強い生命力を発揮しながら、人類歴史を導いてきた多様な宗教の背後に、すべての存在の究極的根源としての創造主であられる神様が存在してきたことを基本前提として提示する。多くの宗教が歴史の中で生成し消滅する過程を経ながら、時代と文化圏の差異により宗教間の顕著な差異がつくられてきたが、宗教の背後に究極的存在としての絶対者、すなわち神様が存在するがゆえに、宗教が時代と地域の特性により人類の精神を善なる方向に教え導くという共通の目的性を共有してきたというのである¹⁾。存在の根源としての超越的絶対者が、人類の歴史全体の中で共にしながら、時代と地域の特性に適合した宗教性を人間の生の中で発現させ、人類を善なる目的に導いてきたのである。

このような統一思想の宗教観は、宗教の普遍性と個別性の緊張関係を解消し、両者の様相を共存させようとする試みと見ることができる。宗教の背後で役事される神様の絶対的‘み旨’を共有する限り、宗教は互いの関係の中で普遍的共通基盤—それが信仰心や愛、利他心等何であれ—を発見し、お互いの同質性

を悟りながら、調和と統一、‘和解’を試みることができる。また宗教は、長い間異なった時代的、地域的文脈を土台に発展してきたため、ある宗教の真理体系が他の宗教のそれを単純に自身のものに還元しようとしたり、すぐには一般化することのできない、各宗教だけの独特性を認めなければならない。したがって、個別性を擁護する次元では、無分別な宗教混合主義 (religious syncretism) を止揚しなければならないし、普遍性を認める次元では、宗教間の差異を過度に強調したあげく他の宗教に対する不可知論をくり広げることや、排他的な態度を取ることを警戒しなければならない。このように、宗教間の同一と差異とが両立しうる弁証的關係を、統一思想の宗教観で発見することができる。

ここである人は、20 世紀中後半にアメリカを中心に活発に議論された‘神中心多元主義 (God-centered Pluralism)’を思い起こすかも知れない。ジョン・ヒック (John Hick) やウィルフレッド・キャントウェル・スミス (Wilfred Cantwell Smith) 等が主軸となってくり広げた神中心多元主義の特徴を大まかに整理してみると、次の通りである。現象的には相互還元されない独特さ、特有性を持った宗教であるとしても、人間の有限な認識が把握できない領域で実存する究極的、超越的存在が、各宗教あるいは宗教的経験に内在していて、各宗教はそれなりの真理性を内包している本物の宗教なのである。さらに、各宗教がそのような超越的存在を共通基盤として媒介していることを悟って、互いに和合し、相通じることができるという立場である。しかし、神中心多元主義が多元性を堅持するために唱える‘神’の存在的/認識的超越性は、統一思想の宗教観が受け入れることのできない部分である。統一思想の宗教観は、神の超越性や神の経験に対する神秘性を強調するにとどまらず、神について‘知ることが出来る’という確固たる立場で、神について明確に知らせてくれる宗教であればあるほど本物の宗教であることを強調する。

このような脈絡で本論文は、神中心多元主義と統一思想の宗教観を比較分析し、共通点と差異点を糾明することによって、統一思想宗教観の具体的性格を表わすところに一次的な目的がある。さらには、統一思想が内包している‘父母としての神様’を中心に、宗教が互いの特有な個性を享有しながらも、人類の平和を先導できる兄弟としての心情的共通基台を形成して行ける可能性について議論してみようと思う²⁾。21 世紀の核心的時代精神である多元主義が可能であるためには、神様と神様の心情を基盤とした統一主義の流れが共存しなければならない。多元主義と統一主義の共存という側面で、統一思想の宗教観が提示する平和のひとつの解決法を提示しようと思う。

II. 統一思想の宗教観は‘神中心多元主義’なのか？

ジョン・ヒックは、神中心多元主義の観点を哲学的に定礎した人物として、カントの物自体(noumenon)と現象(phenomena)を区別する図式を借用し、各宗教は究極的実在(the Real)が互いに異なった時代と文化圏で顕現(manifestation)したものであると主張した。彼は宗教間の関係において、これまで自身の宗教の創始者を中心に排他的に進行されてきた前例を越えて、超越的な神(実在)を中心に宗教の多元的位相を定立するべきだと見て、これを天動説から地動説へのコペルニクスの転回と自評した³⁾。

また、ウィルフレッド・キャントウェル・スミスもジョン・ヒックと同様に、超越的、究極的実在が文化圏により異なって現れたのが宗教だということを強調するために、人間が持っている‘信仰心’を宗教の本質と見て、それぞれ異なった宗教的伝統は、この信仰心が多様な文化圏で独特に発展しつつ、制度や教理として蓄積された結果に過ぎないと主張した。すなわち、宗教という制度的伝統が先に存在したのでなく、超越的絶対者と関係を結ぶ人間固有の信仰心の発露が、独特な時代的、地域的文脈を土壌として多様な形態に展開しながら、宗教という制度的形態で蓄積されたというのである⁴⁾。ヒックとスミスのこのような主張の共通点は、今日世界の宗教が‘宗教’の定義を下すのが難しいほど互いに相異なった構造と内容を持っているとしても、宗教の本質に入れば究極的な共通基盤、すなわち超越的実在に連結しているという点である。

統一思想の宗教観も、一人のお方である超越的絶対者が、人類を善なる方向に導くために、その時代と地域的特性に合った宗教を中心に文明が発展するように導いたと見る。一つの目的性を共有する宗教の究極的本質が存在することを認め、その目的性によりそれぞれの宗教が遂行してきた役割と価値を認めている。このような特徴は、上で言及した神中心多元主義とある程度一脈相通じているところである。同じ脈絡で、ヒックが存在論的に接近して、スミスが人間の根本的信仰心という次元で本性論的に接近しているとすれば、統一思想の宗教観は、両者を併せた目的論的(teleological)な次元で神の救援摂理を説明している。

実際、1990年代初めに家庭連合の支援下に国際宗教財団で出版した『世界経典』の序論を見ると、神中心多元主義の基本脈絡を認識し、ある程度その軌を一にしていることが発見できる。次の文はそのような解釈の手がかりを提供している。

“全ての宗教界の神学者は他の宗教について積極的な価値を見出しつつあり、これまでの偏見を克服しようと努力している。今や、神、あるいはどのような名前と呼ばれようとも、その「究極的実在」の探求こそ全宗教の根源にあることが広く確認されている。”

“今日、ウィルフレッド・キャントウエル・スミス、ジョン・ヒック、レイモンド・パニッカーなど多数の学者によって「世界神学」の必要性が叫ばれている。彼らは、宗教は厳格で一貫した哲学体系なのではない、と説明する。ある固有の宗教はある支配的なテーマをもっているかもしれないが、文化の基盤としては、人間経験のすべての側面について教えを与えることができるほど幅広くなければならない⁵⁾。”

もちろんこの序論は、文鮮明先生の直接的な言明ではないとしても、先生の教えに従う家庭連合の宗教間関係に対する神学的地平を垣間見ることのできる資料となりうる。要するに、文鮮明先生と家庭連合は、存在の根源として、そして人間経験の根源的根として実在する超越的絶対者を中心に、すべての宗教はお互いが兄弟宗教であることを悟り、教理的論争と争いを越えて、お互いを本物の宗教として敬いながら、世界平和のために先立つべきであるという点を強調している。このような側面で、統一思想の宗教観と、20世紀後半の神中心多元主義を支持する神学者たちの地平が、ある程度触れ合っていると見ることができる。

しかし、宗教の本質と宗教間の関係に対する統一思想の観点が、神中心的多元主義と完全に一致するのではない。事実、統一思想の宗教観をより克明に表わすためには、神中心的多元主義とどのように違うかを照明することがより効果的であろう。最も大きな差異点は、次の通りである。神中心的多元主義が文字どおり‘多元主義’となるためには、超越的神の存在に対する説明が、ある一つの宗教の教理や教えに完全に還元されたり、従属されてはならない。万一そのようになるとしたら、真理の排他的独占が成り立つために、その真理を抱いている宗教が本物の宗教となり、他の宗教は真理を表わすことにおいて劣等な宗教、さらには‘偽り’の宗教に転落してしまう。したがって、宗教の水平的多元性を守るために、ヒックやスミス、レイモン・パニッカー(Raimon Panikkar)等が共通的に取る方式は、神について完全には知ることのできない人間の有限な認識能力を強調しつつ、神の存在を超越的領域に移管し、神に対する経験を、思弁的理性では把握することのできない、神秘的で全体的(holistic)な事件と規定することである。

問題は、宗教の水平的多元性を堅持するために、神中心多元主義が必然的に打ち出すしかない神の超越性、神の経験に対する神秘性が、今まで神中心多元主義が批判されてきた核心の根拠となってきた、という点である。問題の核心は、人間の認識が到達できない超越的、神秘的領域でのみ神に会うことができるとするならば、各宗教または宗教的経験が神の顕現であると言える根拠を見

出すことができないし、そのように顕現する理由については、さらに説明できないという点である。また、そのように想定された超越的神の存在を受け入れることのできる論理を持っていなかった宗教は、このような宗教神学的地平に同意する理由が全くないのである。それゆえに、批評家たちは、ジョン・ヒックの論理の中から唯一神観に基盤を置いた‘帝国主義’的要素を探したり、キリスト教包括主義の変形した形態ではないのかという疑心を加重させてきたのが事実である⁶⁾。

統一思想の宗教観によると、宗教の裏面に存在する超越的絶対者の摂理により、善なる方向に人類を教え導いて教育させるという面で、宗教は同じ線上で理解することができる。しかし、これは宗教の本質的意味、目的という観点に限って、世界的に人類文明を引っ張ってきた宗教が、同等な価値と位相を持っていることを言うのであって、神中心多元主義が主張するように、すべての宗教が神の存在から‘無限の認識の距離(infinite epistemic distance)’を置いており、くり広げる内容の価値が、全く等しいことを主張するのではない。何よりも統一思想は、神について不可知論的立場を取るのではなく、‘知ることが出来る’という立場を確固とし、神について明確に知らせてくれる宗教であればあるほど本物の宗教であることを強調する。すなわち、世界の宗教が人類を善なる方向に導く根本的目的性を共有しているが、その善なる方向というものが、結局神について正しく知り、神の創造目的通りに生きていくことであると見る時、そのような神のみ旨を明確で具体的に表わすことにおいて、摂理的段階によって宗教ごとに差異があることを認めている。

最後の心情世界を連結させることのできる宗教は、神様が最も哀れだということ細密に教えるてくれる宗教です。神様が良くて立派なのではありません。哀れでくやしい神様、悔しくて恨があふれる神様です。したがって、このことを細密に教えてくれる宗教が出てこなければなりません。それでこそ孝子になることができるのです。皆さんが悲しい神様を分からない時には、解放させてくれる神様、審判する神様も分からないのです。したがって、歴史的な神様の心情に通じることができる宗教が出てきてこそ、歴史的な宗教の使命を果たすのであり、時代的な神様の心情を教えるてくれることのできる宗教が出てきてこそ、時代的な宗教の使命を果たすのです。そして、未来的な神様の心情を教えてくれ、そのような心情に通じることができるようにして、その心情を代身して神様を慰めることのできる宗教をつくってこそ、その宗教は終わりの日に残る宗教となるのです⁷⁾。

上の文をよくみると、文鮮明先生の宗教観が神中心的多元主義と構造的に類似した面があるかもしれないが、‘多元主義’の脈絡の中で理解されるのは困難であるという事実を知ることができる。その最も大きな理由は、宗教の歴史のみならず人類歴史全体を貫いている‘神の摂理’としての巨大談論(meta-narrative)を提示しており、このような論理の準拠を、神様の心情について最も近く教えることのできる特定宗教、すなわち家庭連合で見出しているためである。事実このような立場は、多元主義よりは、包括主義や排他主義的な地平に近い。

今日の宗教が、宗教としての同一の根本目的を共有しているといっても、その目的性に従い神について明確にしなければならない宗教の使命を考えてみる時、すべての宗教が同一の線上に立っているのではない。カール・ラーナー(Karl Rahner)の論理通り、究極的な真理が“明示化され(explicit)、概念化され(conceptualize)、主題化(thematize)⁸⁾”される程度の差異があるだけでなく、より究極的には‘心情’的な次元で神の心情をどの程度表わすかによって、宗教間に差異が生じるのである⁹⁾。

ここで、統一思想の宗教に関する地平の中に、多元主義的な要素と包括主義的な要素が混在しているように見えるため、一貫した解釈が必要であろう。一方では、各宗教が信奉する人格的/非人格的、究極的實在が、一人であられる神様の他の名前にすぎないことを明確にし、宗教が時代的、地域的に特化した様相で人類の心霊を成長させる役割をしてきたと見る点等で、宗教が‘真’であることを認める多元主義的要素を明らかに持っている。しかし、また一方では、各宗教が時代と地域特性に合わせて人類を教え導くとしても、そのように時代的、地域的に特化した宗教の心情、あるいは霊性というものが、結局、神と愛で一つとなる‘神人愛一体’の真の人間を導き出す媒介的方便であることを明らかにしている。すなわち、何が多元性を持つのかという問いにおいて、根本目的を成すための方便が多元性を持つのであって、その方便が追求する本質的指向点自体が多元性を持つのではないのである¹⁰⁾。

そうだとすれば、‘神人愛一体’という‘一つ’の指向点から逆に各宗教の教えを眺めた時、果たしてどんな宗教が、神人愛一体の為に必ず体恤しなければならない神の隠された心情を完全に表わしているのか、ということに対する評価が可能であるという論理が出てくる。もちろん、このような評価は、ジョン・ヒックが主張するように、宗教が次第に‘自己中心的’から‘實在中心的’な指向性を持つのかといった、抽象的で形式的な基準¹¹⁾だけをもってできるのではなく、その究極的實在の深い人格的内面を、心情的に、すなわち知的に、情的に、意的に完全に表わすことのできる内容と形式をすべてそろえているにかかっている。

神中心的多元主義を説明する時、典型的に使用するモデルである‘一つの山の頂上へ向かう多くの道’を例にあげて説明しようとするなら、山の頂上に最も近く、また最初に到達した宗教が、山の麓を眺めながら、山の頂上に向かう多くの道のうち、どんな道があまり遠まわりせず正確に山の頂上に導いているのか、ということに対する判断ができるようになるのである。もちろん山の頂上に一番先に到達した宗教がつくった道が、山の頂上へ向かう最高、最善の道であることを予想するのは、それほど難しいことではない。さらには、多様な道(宗教)を連結して道の要所に表示板を立てることによって、山の頂上に行くことができる包括的なロードマップを提供することもできるだろう。このように統一思想の宗教観は、一つの山の頂上に向かう多様な道という神中心的多元主義の構造を取りながらも、山の頂上に先に到達した宗教が、他の宗教の道を連結し包容することができるという包括主義的様相を併せ持っている¹²⁾。

エベレスト山頂を中心として見る時、数多くの山々がすべてそれを主峰として連結しています。そしてエベレスト山頂一つをつくっておくことによって、連峰をなしている山脈が存在するのと同じように、宗教も今まで生き残って、歴史時代に貢献したという立場に立たなければなりません。そのように連結した峰が合わさって、エベレスト山頂を仰ぐことのできる基準に属しているように、宗教圏もそのようであってこそあの国に行って解放が起こるということです。主峰がない状況で連峰がいくら自己主張をしたとしても、それは無価値なのです。それだからすべての宗教圏を束ね、信義の時代に行くことのできる新しい宗教は、歴史とともに、そして時代とともに漠然として観念的な神様を主張するのではなく、実際の生活に主導的役割をすることのできる生活裏面の動機的要素として、生活の行動を制裁し主導できる宗教背景をそなえなければなりません。このようになることによって、宗教解放がなされるようになります¹³⁾。

このように神中心的多元主義から包括主義につながる流れは、家庭連合の救援に対する概念からも見出すことができる。『原理講論』によれば、“病気にかかった人間を救うということは、病気になる前の状態に復帰するということの意味するし、水に溺れた人を救うということは、すなわち、水に溺れる以前の立場にまで復帰するという意味”なのである。したがって、宗教でいう‘罪からの救援’は、罪を犯す前、すなわち“罪のない創造本然の立場にまで復帰させるという意味¹⁴⁾”を持っている。このように人類を罪のなかった時点に戻そうとする家庭連合の救援観は、二つの様相を持っており、一つは漸進的救援で

あり、もう一つは決定的救援である。前者は、墮落以後急激に墜落してしまった人間の心霊と知能を漸進的に成長させ、霊人体¹⁵⁾を墮落以前までの水準に引き上げることであり、後者は、人類の“真の父母”として来るメシアを通じて、墮落に因る悪なる血統を根絶し、神様を中心とする善なる血統に生まれ変わることである。すなわち、漸進的救援は墮落以前の水準まで、そして決定的救援はその墮落の痕跡を消して完全な神人愛一体の境地に至ることのできる関門を開くのである。

このような漸進的救援と決定的救援は、上で言及した神中心的多元主義と包括主義の脈絡とそのまま連結される。すなわち、人類歴史の中で世界宗教は、神の摂理により時代と地域に合うように人類の漸進的救援を導いてきたし、家庭連合が主管する‘祝福’の儀式を通じて、決定的救援に至ることが出来ると見る。漸進的救援という脈絡では、世界宗教の水平的な真生さを認めることによって多元主義的要素を表わし、決定的救援の脈絡では、世界宗教の漸進的救援を締めくくり、新たな段階を開く家庭連合の特別な(あるいは排他的)地位を認めることによって、包括主義的な要素を表わしている。

それならば、統一思想の宗教観には排他主義的な要素はないのであろうか？基本的に、宗教の背後で役事される神様の実存を主張する統一思想の宗教観には、他の宗教に対する排他的態度を発見するのが難しい。しかし、神の存在を否定する無神論、全てのもを物質に還元してしまう唯物論と、これらの思想を背景とした共産主義に対して、統一思想は強く否定するし、克服するために多くの努力を傾注した¹⁶⁾。統一思想の観点では、このような唯物論と共産主義は、あたかも一つの山の頂上に登る多くの行程の中で断崖へ向かう道と同じであるため、その道を遮らざるを得ない排他的‘瞬間’が必要なのである。ところで、このような排他的態度は、関係の永遠な断絶を指向するのではなく、むしろ関係の回復のために不可分の必要な過程として認識される。すなわち、断崖へ向かう道を遮った後には、その道をただ断絶させ閉鎖させるのではなく、山の頂上へ向かう道へと連結させることによって、その道に沿って行った人々を包容しなければならないことを意味する。

III. 多元主義と統一主義の平和的両立と共存

宗教はどこへ行かなければならないのでしょうか？真の父母の因縁を訪ねて行かなければなりません。神様の愛の門を通過して、本来の因縁、すなわち本然の真の父母を中心として神様の子女の立場を復帰しようとするのが今までの宗教の最終目的です¹⁷⁾。

先立って議論した通り、統一思想の宗教観は、存在の根源、本体としての絶対者、すなわち神様を中心に繰り広げられる。統一思想が明らかにする神様は、神中心多元主義者たちが主張するように、人間の認識が到達できない、神秘的、直観的経験でのみ体験しうる超越的存在でなく、人間の知・情・意の根となる心情で誰よりも近く親密に共鳴できる存在である¹⁸⁾。統一思想はこのような心情の形を‘父母と子女’間の関係で形成されるものであることを明らかにし、イエスが‘天にいらっしゃる父(abba)’と告白したごとく、神様を人類の‘父母’として表わす¹⁹⁾。

このような統一思想の神観は、人類の歴史を主導してきた宗教が、神様と人類が父母と子女の不可分的心情関係を回復できるように導く神の摂理的方便であったという思想に自然とつながる。父母であられる神様は、子供としての人類に対するにあたって別け隔てせず、全地球上にわたり、人類の文明が成し遂げてきた足跡ごとに、その時代と地域に合った宗教的真理と霊性の道に従って、人間の心情を育ててきたのである。したがって、今日世界的宗教の教えは、窮極的に同じ指向点を示している。その指向点が、宗教によって人格的な神を指すこともでき、非人格的な原理を指すこともできるが、その差異は、父母としての神様の人格を指すのか、あるいは父母としての神様が持っている内的原理、属性を指すのかという差異にすぎず、‘統一’されることのない根本的差異点を意味するのではない²⁰⁾。

神様と人間の関係を父母と子女の関係と定礎し、その関係の属性を心情的関係と規定することは、今までカトリック神学と新教神学がそれぞれの神学的特色として主張してきた神と人間の中の‘存在の類比(analogy of being)’や‘信仰の類比(analogy of faith)’の脈絡とは区別される。すなわち、神に似ること(imitatio Dei)の根幹を、単純に神様に似た‘存在’としての資格でのみ探すのではなく、また、変質した人間性に失望し、全てのことを神様の恩寵とそれにとまなう信仰でのみ、その似ていることの基準を探すのではなく、この二つを包括しながら、神様の心情と人間の心情が父子の関係の中に互いに愛で充滿することを指向する‘心情の類比(analogy of heart)’を指すのである²¹⁾。

このような脈絡で、統一思想の唯一神観に立脚した宗教観は、バルトの憂慮を避けることができる。すなわち、宗教の教えを、神様といかなる関係性も結ぶことが出来ない、人間の利己的動機から投影された偶像崇拜として否定したり排斥する必要がないのである。各宗教の教えの中に内在した神様の心情を共に見出して、そのように連結した心情の輪を通じて互いに兄弟愛を分かちあうことこそ、今日すべての宗教家たちに要求される対話の姿勢となるためである。

今日人類が信じている神様は、私の神様であると同時に人類の神様です。

私たちの神様であると同時に世界的な神様であり、世界的な神様であると同時に天地の神様です。それと同時に宇宙的な父母です。世界には神様を叫ぶ教派が多いです。しかし、教派圏内で叫ぶ神様はもはや必要ありません。教派を超越して、全天地の中心として信じて呼ぶことができ、全体を代身して、神様を私の父と呼ぶことのできる資格がある存在が集まってこそ、この地上に神様を侍ることができます²²⁾。

父母としての神様を侍り、すべての宗教人たちが超宗教的、超教派的な兄弟姉妹の心情的関係を形成しようという、統一思想のこのようなメッセージが、今日宗教多元主義の時代的脈絡の中でどのように受け入れられるであろうか？もちろん表面的に見る時、ある宗教の神観にすべての宗教を併せるメタ談論をくり広げることだけでも多元主義の文脈を抜け出すのである。しかし、統一思想の超宗教平和思想が、今日宗教多元主義が強調する宗教間の相互尊重、協力、寛容、和解、祝祭の脈絡を根本的に支持していることに注目する必要がある。結局、多元主義が指向することは、宗教と宗教が互いに消耗的で排他的な闘争を止め、互いの差異を認識する中で相手の価値を認め尊重しながら、窮極的に人類の平和のために相通じることのできる知恵を模索することにある。統一思想の宗教観は、これを積極的に支持し、いや単純に支持するのにとどまらず、このような和合の場を持続させることのできる究極的基盤、すなわち父母としての神を中心とした真の愛の文化を主張している。

ある者は、神様を共通基盤として掲げることに対する唯一神観の一方的暴力性を指摘するかもしれない。普遍的な平和の基準を主張すること自体が、いくらその意図が良いとしても、排他主義的暴力性の危険を内包するがゆえに、時代と地域により他の生の文脈に焦点を合わせて、関係の基盤に相対的に接近しなければならぬと主張したりする²³⁾。今日のように全世界が一つの生活圏に入ってきて、文化、宗教等の多様な生の基盤が絶えず交差する多元主義世界で、このような主張は一見妥当であることは事実だが、結局多様性を包容できる根源的な力がなければ、多様性の維持自体が不可能であることを認識する必要がある。このことは、多様性を尊重して包容しなければならないという、その為性の根本動力が何であるかに対して、深い省察が必要であることを意味する。

宗教多元主義の脈絡の中で、このような動力は、各宗教が唱えるアガペー、慈悲、仁義等の様々な徳目として表現できるだろうが、明らかな共通点は、他人や万物と深い共感の境地において、相手のためにしようという為他的な力を指すという事実である。多様性を認め、水平的関係を成すことのできる、その為他的指向性をどのように呼ぼうと、その力が持続的に宗教間関係を平和的に導かずには、宗教多元主義が期待する相互尊重と寛容の基台は、いつでもこ

われうる薄氷のような危ういものである。したがって、その力の究極的な根源を見出し、平和の普遍的な基台をたてずには、真生な多元主義社会をつくることができないという、一面逆説的な結論に到達するようになるのである。

統一思想は、このような力の根源を、父母であられる神様の真の愛と規定する。愛、特に父母の愛は、人類が四海同胞主義を基盤として兄弟の心情を分かち合えるようにする原動力である²⁴⁾。父母の愛を媒介としてのみ、個人と集団の固有な個性を尊重し、多様性を多様性それ自体と認定しながらも、その中に含まれた普遍的価値をより一層深く体化して行ける文化を開いていくことができる。しかし、その愛の絶対的起源が存在しないとするならば、先立って議論した通り、カイン型人生観とアベル人生観の絶え間ない相反と対立の中で、宗教間の調和と協力のための動きは、明確な方向性を堅持できずに、ただ周辺環境により任意的に結成される一回的で形式的な理想主義にとどまるほかないのである。

変化する世界の中で不変なる愛の理想、平和の理想を見出すということは不可能であるということ、歴史を通じて私たちはあまりにもよく知っている。‘平和’という言葉自体が、日常的な言語使用において、ぎこちなく荒唐な感じすら持たせる今日、政治権力や社会的地位等の外的条件が結びついた複雑な利害関係の中で、平和の絶対的基準を見出すことは不可能である。このことは宗教間の関係でも同じである。世俗と分離した純粋な宗教というものは存在せず、それぞれの宗教は、自身が置かれている社会的地位(social location)と関連した世の中と不可分の関係を結んで生きていくのである。したがって、人間中心の宗教連合運動、平和運動はその多くが自らたてた相対的で矛盾的な限界にぶつかるようになっていく。統一思想は、このような状況でただ父母であられる神様の真の愛のみがこの限界を克服できる基準、すなわち恒久的平和を安着させることのできる愛の絶対的根源になりうることを強調する。

このように父母であられる神様を中心に、宗教が兄弟としての心情的紐帯関係を結んでいく世界では、多元主義と‘統一主義(unificationism)’が互いに両立し共存しうる脈絡をつくり出す。統一思想の‘統一’という概念は、個性を無視したまま一方的な全体主義として成就できるのではなく、相手にないそれぞれの個性を維持する中で、互いによく与えよく受けることによって、調和のとれた関係性をなす時に実現できる概念である。文鮮明先生は、統一の概念と一脈相通じる平和の概念を説明しながら、次のようにおっしゃるのである。“平和というのは、その文字通り平たいのです。平たくなって変わるのです。本質が変化して、変化することは化学の‘化’を使いますが、この‘화’は、和する‘和’という文字です。本質そのままを中心として一つになるのです。一和の‘和’です²⁵⁾。”

これを父母と子女のパラダイムで眺めれば、さらに直観的である。すべての人が独特で特別な個性を持った子供の立場で、自身の活動の根、原因、動機を父母であられる神様の心情と共鳴して生きていくなれば、このような世界では一人一人の際立った個性がすべて神性の価値の顕現であるため、むやみに他人の個性を善し悪しの基準で排斥したり、特定の一つの範疇内に一方的に包括することはできない。ある子女を他の子女に代替することができないのと同じである。真生なる多元主義とは、このように子女としての一人一人の唯一無二性から始まると見ることができる。これと同時に、個人の固有性の最も奥深い起源(orientation)には、父母であられる神様の心情が刻印されているため、多元主義世界は、神様の心情を共有する統一主義世界と触れ合っている。“多元性と統一性の関係は、結局二律背反的なものでなく、一脈相通じるのである²⁶⁾。”

今日宗教多元主義の趨勢は、神中心多元主義を越えて、宗教間の共通基盤を排除したまま差異を強調する受容モデル(acceptance model)²⁷⁾が主流をなしている。このモデルの思想的流れを定礎した人物として、ルードヴィヒ・ウィトゲンシュタイン(Ludwig Wittgenstein)を挙げることができ、ジョージ・リンドベック(George Lindbeck)や D. Z. Phillips 等が彼の言語哲学を継承し、このような多元主義の流れを強固にした。一つ興味深い点は、ウィトゲンシュタインがある概念を理解するにあたって、‘本質主義’に対抗し、言語文化的脈絡にともなう多様性を強調しようとする時に唱えた象徴的表現が、‘家族類似性(family resemblance)’というものであった²⁸⁾。これを宗教共同体に適用すれば、宗教間に、ある概念的類似性、例えば‘愛’という普遍概念があるように見えるとしても、各共同体が作ってきた特有の言語文化的脈絡に因って、各宗教が標榜する‘愛’という概念は、ある共通基盤としての‘本質’として収斂されることのない、相互還元不可能な(irreducible)差異を表わすのである²⁹⁾。

私はここでウィトゲンシュタインの‘家族類似性’という概念を、少し変わった観点で眺めようと思う。統一思想の宗教観に立脚してみる時、この家族類似性という言葉は、実に宗教間の関係を現わすのに非常に適切な表現に違いない。ウィトゲンシュタインの哲学的洞察により、各宗教は歴史的伝統を形成し、ある単純な図式通りに簡単に一般化、普遍化されない思惟の深さと個性を持っているが、これは実際、家族構成員たちがそれぞれ独特な個性的存在としての生命力を持っており、いくら双子に生まれたとしても、相互還元や置換されることができないのと同じ理屈である。しかし、家族構成員が互いに‘類似’しうるのは、まさにその生命の起源、すなわち父母の存在と不可分的な関係を結んでいるためである。単純に存在的類似性(遺伝子)や言語、文化、思想的類似性を越えて、その類似性の起源が、人間の存在およびその文化の方向性に総体的に内在する心情、すなわち父母の心情から始まるとするならば、家族構成員

私たちはお互いが持つ独特な個性の価値を充分享受する中に、家族としての心情的連合をなすことができるであろう。このように、統一思想の宗教観の中では、多元主義的地平と統一主義的地平が互いに触れ合っているのである。

IV. おわりに

これまで統一思想の宗教観を、宗教神学的脈絡で扱ってみた。統一思想の宗教観は、何よりも宗教の究極的共通基盤としての神の存在を強調する。多様な宗教が歴史の中で生成し消滅する過程を経ながら、宗教間の顕著な差異をつくってきたにもかかわらず、神の摂理により時代と地域の特性に合わせて、人類の精神を善なる方向に教え導く根本目的を共有してきたことを浮かび上がらせる。また、漸進的救援をなすべき宗教の使命という次元で、宗教の真生さを認める点等を見る時、神中心多元主義的地平とある程度その軌を一にしていることを発見することができた。

しかし、統一思想の宗教観は、神中心多元主義が‘多元主義’としてのアイデンティティを堅持するために必然的に打ち出すしかない、神の超越性や神の経験に対する神秘性を強調するにとどまらず、神について‘知ることが出来る’という立場を確固なものにし、神について明確に知らせる宗教であればあるほど本物の宗教であることを強調する。すなわち、世界宗教が人類を善なる方向に導く根本目的を共有してはいるが、そのような神のみ旨を明確で具体的に表わすことにおいては、宗教ごとに差異があることを認めるのである。宗教の歴史のみならず、人類全体の歴史を貫いている神の摂理としての巨大談論を提示しており、そのような談論の準拠を神様の心情について、最も近く教えることのできる父母宗教としての家庭連合で見出しており、また‘祝福結婚’という決定的救援の脈絡で、世界宗教の漸進的救援を締めくくり、新しい段階を開く家庭連合の排他的地位を認めることにより、包括主義的な要素を表わしている。このように統一思想の宗教観は、一つの山の頂上に向かう多様な道という神中心的多元主義の構造を取りながらも、山の頂上に先に到達した宗教が他の宗教の道を連結し、包容することができるという包括主義的様相を併せ持っている。

統一思想が内包する神様は、神中心多元主義者たちが主張するような、人間の認識が到達できない、神秘的、直観的経験としてのみ体験しうる超越的存在でなく、人間の知・情・意の根となる心情で誰よりも近く親密に共鳴することによって、人間の総体的意識と行動の目的と方向を呼び覚ます存在である。統一思想は、このような心情の形を‘父母と子女’間の関係で形成されるものであることを明らかにし、イエスが‘天にいらっしゃる父(abba)’と告白したごとく、神様を人類の‘父母’と表わす。

このように、父母であられる神様を中心に、宗教が兄弟としての心情的紐帯関係を結んでいく世界では、多元主義と統一主義が互いに両立、共存できる脈絡をつくり出す。ここで統一という概念は、個性を無視したまま一方的な全体主義として成就できるものではなく、相手にないそれぞれの個性を維持する中で、互いによく与えよく受けることによって、調和のとれた関係性をなす時に実現可能な概念である。すべての人が独特で特別な個性を持った子女の立場で、自身の活動の根、原因、動機を父母であられる神様の心情と連結させることさえできるなら、一人一人の際立った個性がすべて神性の価値の顕現となるため、むやみに他人の個性を善し悪しの基準で排斥したり、特定の一つの範疇内に一方的に包括することはできない。このように、統一思想の宗教観の中では、多元主義的地平と統一主義的地平が互いに触れ合っているのである。

注

1) このような統一思想の宗教観を垣間見ることのできる圧縮的な文を『統一思想要綱』から次の通り発見できる。

“地球上の数多くの宗教、文化、思想、民族は、それぞれ価値観が異なっているのが普通であるとしても、それらを生じせしめた根源者は一つしかないとすれば、そこには根源者に由来する共通性が必ずあるはずである。今日まで数多くの宗教が現れたが、決して、それぞれの教祖たちが自分勝手に宗教をつくりあげたのではなかった。神は全人類を救うために、一定の時代に、一定の地域に、一定の教祖を立てて、まずもって、その時代、その地域の人々を善なる方向へ導こうとされたのである。すなわち神は時や場所によって言語、習慣、環境の異なる人々に対して、その時代、その地域に適した宗教を立てて救いの摂理を展開されたのである。”統一思想研究院、『統一思想要綱(頭翼思想)』(忠南, 天安: 鮮文大学出版部), 311.

2) 『統一思想要綱』はまえがきで、“人類の親であり、すべての宗教を設立された最高の中心である神の、真なる愛によって、対立する諸民族や諸宗教を和解せしめて、人類一家族の理念を実施すると同時に、人類のあらゆる難問題を根本的に解決することによって、永遠なる神の真の愛の理想世界を実現しようとする神の思想”と、その性格を規定している。統一思想研究院、『統一思想要綱(頭翼思想)』, 8.

3) John Hick, *God Has Many Names* (Philadelphia: The Westminster Press, 1982), 36; ハン・インチョル, 『宗教多元主義の類型』(京畿 高陽: 韓国キリスト教研究所, 2000), 58-80.

4) Wilfred Cantwell Smith, *Towards a World Theology* (Philadelphia: The Westminster Press, 1981); ハン・インチョル, 『宗教多元主義の類型』, 81-95.

5) 国際宗教財団, 『世界経典』(ソウル: 国際宗教財団出版部, 1991), 5-6.

- 6) 次を参照: Paul F. Knitter, *Introducing Theologies of Religions* (Maryknoll, N. Y. : Orbis Books, 2002), 157-162.
- 7) 文鮮明先生御言編纂委員会編, 『文鮮明先生御言選集第 151 巻』 (ソウル: 成和出版社, 1989), 128. 以下『文鮮明先生御言選集第 00 巻』と簡略に表記
- 8) Karl Rahner, *Foundations of Christian Faith* (London: Darton Longman & Todd, 1978), 52; ハン・インチョル, 『宗教多元主義の類型』, 34.
- 9) 心情の概念をここで詳しく扱うことはできないが、理性的で論理的な次元だけでなく情的で意的な様相の根元として人格の全人的(holistic)根拠と見ることができ、これは今日の霊性の概念と近く相対している。
- 10) “この地上には数多くの宗教があります。人類が分散しているので人類を收拾しようと、自然と、各民族にともなう宗教が必要とされます。それぞれの歴史と環境、文化の背景と風俗、習慣が違うため、このような様々な形態を一つの目的で收拾するためには、数多くの宗派がなければなりません。例えば、川を見ると上流には多くの支流があります。この多くの支流が下れば下るほど、互いに合わさりながら、その数がだんだん減り、結局一つの川になって大海に入っていきます。同様に、数多くの宗教も一つの流れに合わさって、最後には神様を深重に侍り、神様の愛を占領するところに一つとなって留まるようになります。” 『文鮮明先生御言選集第 23 巻』, 127.
- 11) John Hick, *An Interpretation of Religion: Human Responses to the Transcendent* (New Haven: Yale University Press, 1989), 325.
- 12) 多元主義と包括主義の要素を併せ共に持っているからといって、シューベルト・オグデン(Schubert M. Ogden)の‘多元主義的包括主義(pluralistic inclusivism)’のような路線と似た脈絡で理解してはならないだろう。ハン・インチョルによれば、オグデンは救援の可能性がすべての宗教に“現存(present)”しているとする一方、真の宗教というのはその可能性が決定的に“再現(represent)”する宗教であると理解する。しかし、どんな宗教が真の宗教かということに対しては、ただ自分が属している宗教に局限してのみ判断することができるため、他の宗教が真の宗教なのかに対しては口を閉じるほかはないと言う。またオグデンは、‘多元主義’の脈絡を守るために、不可知論的な立場を堅持していることを発見することができる。次を参照. ハン・インチョル, 『宗教多元主義の類型』, 117-125; Schubert M. Ogden, *Is There Only One True Religion or Are There Many?* (Dallas: Southern Methodist University Press, 1992).
- 13) 『文鮮明先生御言選集第 205 巻』, 277.
- 14) 世界基督教統一神霊協会, 『原理講論』, 114.
- 15) 文鮮明先生は、創造世界が人間の身体と霊人体を基盤として、有形実体世界(地上界)と無形実体世界(霊界)から構成されていることを明らかにしている。世界基督教統一神霊協会, 『原理講論』, 65-69.
- 16) これに関しては、文鮮明先生の教えを土台に彼の弟子である李相憲が整理した次の本を

参照:李相憲,『共産主義の終焉』(ソウル:一念,1986).

17)『文鮮明先生御言選集第22巻』,10.

18)次を参照.黄珍修,「世界平和統一家庭連合 霊性の核心,心情:心情の概念と心情的生の意味」,『統一思想研究』9(2015).

19)『文鮮明先生御言選集第53巻』,286.

20)キリスト教宗教学者であるキム・ギョンジェは、人格的絶対者観と非人格的絶対者観から始まる“両立不可能”にみえて“簡単に地平融合されない”困難に対し、無理に“論理的一貫性と整合性を追求”するよりは、あたかも光の波動と粒子のように“相補的關係性”を土台として理解するべきだと主張する。依然としてカギとなるのは、相補的關係性と見るためには、これらが一つの‘統一’した光を発現しているという前提が必要なのであるが、この前提の根拠を超越的領域に移管すれば、神中心多元主義と全く同じ困難に直面するのである。キム・ギョンジェ,『解析学と宗教学:福音と韓国宗教との出会い』(ソウル:韓国神学研究所,1994),265-266.

21)次を参照.

黄珍修,

22)『文鮮明先生御言選集第1巻』,344.

23) Paul F. Knitter, *Introducing Theologies of Religions*, 173-191.

24)統一思想研究院,『統一思想要綱(頭翼思想)』,767.

25)『文鮮明先生御言選集第250巻』,99.

26)黄珍修,「統一宗教学の定立のための研究」,『清心論叢』10(2013):207.

27) Paul F. Knitter, *Introducing Theologies of Religions*, 171-237.

28) Ludwig Wittgenstein, *Philosophical Investigations* (New York:MacMillan Publishing, 1958), §67.

29)次を参照. George A. Lindbeck, *The Nature of Doctrine: Religion and Theology in a Postliberal Age* (Philadelphia: The Westminster Press, 1984), 32-41.

参考文献

国際宗教財団.『世界経典』.ソウル:国際宗教財団出版部,1991.

キム・ギョンジェ.『解析学と宗教学:福音と韓国宗教との出会い』.ソウル:韓国神学研究所,1994.

文鮮明先生御言編纂委員会編.『文鮮明先生御言選集』.ソウル:成和出版社,1989. 世界基督教統一神霊協会.『原理講論』.ソウル:成和出版社,1995.

世界平和統一家庭連合.『天聖經(増補版)』.ソウル:成和出版社,2013.

世界平和統一家庭連合.『平和経』.ソウル:成和出版社,2013.

李相憲.『共産主義の終焉』.ソウル:一念,1986.

- 統一思想研究院. 『統一思想要綱(頭翼思想)』. 忠南, 天安: 鮮文大学校出版部.
- ハン・インチョル. 『宗教多元主義の類型』. 京畿, 高陽: 韓国キリスト教研究所, 2000.
- Gopin, Marc. Holy War, Holy Peace: How Religion Can Bring Peace to the Middle East. New York: Oxford University Press, 2002.
- Heim, Mark. Salvations: Truth and Difference in Religion. Maryknoll, NY: Orbis Books, 1995.
- Hick, John. An Interpretation of Religion: Human Responses to the Transcendent. New Haven: Yale University Press, 1989.
- _____. God Has Many Names. Philadelphia: The Westminster Press, 1982.
- Knitter, Paul F. Introducing Theologies of Religions. Maryknoll, N. Y.: Orbis Books, 2002.
- _____. One Earth Many Religions: Multifaith Dialogue and Global Responsibility. Maryknoll, N. Y.: Orbis Books, 1995.
- Lindbeck, George A. The Nature of Doctrine: Religion and Theology in a Postliberal Age. Philadelphia: The Westminster Press, 1984.
- Ogden, Schubert M. Is There Only One True Religion or Are There Many?. Dallas: Southern Methodist University Press, 1992.
- Rahner, Karl. Foundations of Christian Faith. London: Darton Longman & Todd, 1978.
- Smith, Wilfred Cantwell. Towards a World Theology. Philadelphia: The Westminster Press, 1981.
- Ward, Thomas J. March to Moscow: The Role of the Reverend Sun Myung Moon in the Collapse of Communism. St. Paul, Minn.: Paragon House, 2006.
- Wittgenstein, Ludwig. Philosophical Investigations. New York: MacMillan Publishing, 1958.
- 黄珍修. 「世界平和統一家庭連合 霊性の核心、心情: 心情の概念と心情的生の意味」. 『統一思想研究』 9 (2015)
- _____. 「存在の類比、信仰の類比、心情の類比」. 『統一神学研究』 13 (2008): 165-197.
- _____. 「統一宗教神学の定立のための研究」. 『清心論叢』 10 (2013): 185-210.